

# 長崎大学教育学部生の社会的スキルに関する研究<sup>1)</sup>

岸川奈津美 (教育学研究科教職実践専攻)

田中 淑香 (教育学研究科教職実践専攻)

丸山 俊幸 (教育学研究科教職実践専攻)

岡崎 耕 (教育学研究科教職実践専攻)

谷口 弘一 (教育学部人間発達講座)

## 問題と目的

中央教育審議会(2011)の答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、若年者の高い失業率・早期離職率、若年無業者の存在などの問題に関して、「学校から社会・職業への移行」や「社会的・職業的自立」といった課題が取りあげられている。そして、それらの課題を解決するために必要な力のひとつとして、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」という4つの能力から構成される基礎的・汎用的能力が指摘されている。

このような現代の若者に求められている能力は社会的スキルと呼ばれ、どの職業に就くにあたって必要であるとされているが、児童生徒・保護者・地域住民など様々な人と接する機会のある教師にとっては、最も必要とされるスキルのひとつであると考えられる。

相川(1996)は、社会的スキルとは、個人と個人の関係や相互作用、あるいは個人と集団との関係や相互作用に関連したことであると述べているが、研究者によって様々な定義がある。そのため本研究では、菊池(1988)によって定義された「対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル(技能)」にしたがって研究をすすめていくこととする。

曾山(2012)が大学教職課程履修学生 527名を対象にして行った研究において、社会的スキルは1年生から4年生にかけて学年が上がるほど得点が高くなり、特に4年生は他学年に比べ社会的スキル得点が有意に高いことが示されている。また男女差においては、男子と女子の得点に有意差はないことが示されている。

本研究では先行研究の知見に基づき、長崎大学教育学部の学生を対象にして、社会的スキルにおける学年間ならびに教育コース間の差について検討を行った。

---

<sup>1)</sup> 本論文は、教育学研究科教職実践専攻の必修科目「児童・生徒の理解と指導Ⅰ」(担当:谷口弘一)において、受講生が3つの少人数グループに分かれ、グループごとに行った調査研究の結果をまとめたものである。

## 方法

### 参加者と手続き

長崎大学教育学部の1年生197名（小学校教育コース106名，中学校教育コース54名，幼稚園教育コース24名，特別支援教育コース13名）と4年生192名（小学校教育コース112名，中学校教育コース59名，幼稚園教育コース10名，特別支援教育コース11名）が調査に参加した。調査は，2013年7月の講義時間中に実施された。

### 質問紙の内容

調査は個人が特定できないように無記名で行われた。フェイスシートでは，回答者の所属を確認するために，学年，教育コース，希望校種を尋ねた。質問紙に含まれていた尺度は以下のとおりである。

**社会的スキル** 菊池（2007）が作成した KiSS-18 を用いた。この尺度は，対人関係を円滑にするスキルを総合的に測定するものである。回答者は，各質問項目の内容がどれくらい自分に当てはまるかについて，「いつもそうでない（1点）」～「いつもそうだ（5点）」の5件法で回答した。なお，本尺度の得点範囲は18点～90点である。

## 結果

社会的スキルに対して，学年（2）×教育コース（4）の2要因分散分析を行った。その結果，教育コースの主効果（ $F(3, 381)=3.02, p<.05$ ）ならびに交互作用

（ $F(3, 381)=10.26, p<.01$ ）が有意となった

（Figure 1）。教育コースの主効果について，多重比較を行った結果，どのコース間にも有意差は見られなかった。交互作用について，下位検定を行った結果，4年生において教育コースの単純主効果が有意となった（ $F(3, 381)=10.65, p<.01$ ）。多重

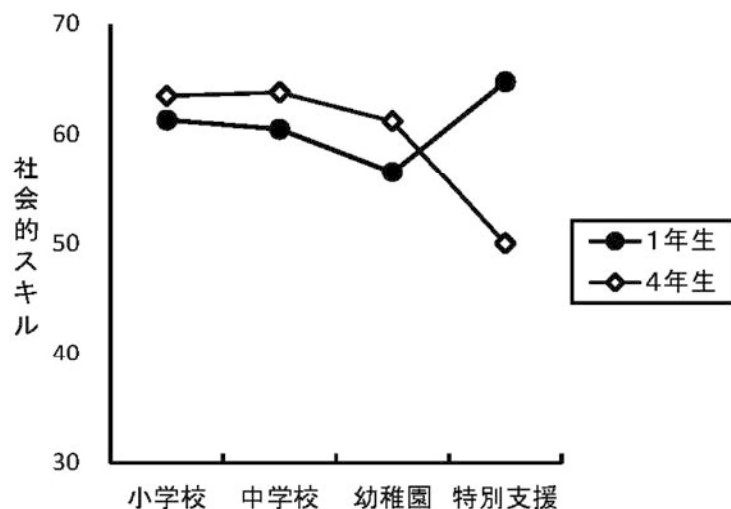


Figure 1 学年・教育コース別の社会的スキル

比較の結果、小学校、中学校、幼稚園教育コースの学生と比べて、特別支援教育コースの学生の社会的スキルが低かった。また、特別支援教育コースにおいて学年の単純主効果が有意であり、1年生よりも4年生の社会的スキルが低かった。

## 考察

本研究では、長崎大学教育学部に在学する1年生と4年生の学生を対象にして、KiSS-18による社会的スキルの調査を行った。その結果、学年による社会的スキルの有意な差は認められなかった。こうした結果は、学年が上がるほど、社会的スキルが高くなることを見いだした曾山（2008）とは異なるものであり、地域差や学校差を含めて、今後、さらに詳細な検討が必要であろう。

学年と教育コースには有意な交互作用が認められ、下位検定の結果、特別支援教育コース4年生の社会的スキルが有意に低かった。他のコースにおいて学年差が見られない中、特別支援教育コースの4年生のみが社会的スキルが低下している要因としては、集団の中に著しく社会的スキルが低い個人がいることや、集団全体の社会的スキルがもともと低いことなどが考えられる。

本研究では、現在、在学中の1年生と4年生を対象にして、社会的スキルについて横断的調査を行った。今後の研究では、現1年生が大学を卒業するまでの4年間にわたって縦断的調査を行い、社会的スキルの経時的変化を検討する必要があるであろう。

## 引用文献

- 相川 充 (1996). 社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する— 誠信書房
- 中央教育審議会 (2011). 平成 22 年度「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」答申 文部科学省 <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm)> (2013 年 8 月 1 日)
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- 菊池章夫 (2007). KiSS-18 の構成 菊池章夫 (編) KiSS-18 ハンドブック 川島書店 pp.23-36.
- 曾山和彦 (2008). 教職課程履修学生の社会的スキルと適応感 名城大学教育年報, 2, 32-41.